

台湾閩南語“共”の歴史的変遷

林 愷胤

- 一、はじめに
 - 二、先行研究
 - 三、“共”の本字にかかわる問題
 - 四、中古以前の文献における“共”の使用
 - 五、中古以降「共」の変遷
 - 5.2.1 “共”の後に起点をとる用法
 - 5.2.2 “共”の後に受益者をとる用法
 - 5.2.3 “共”の後に被動者をとる用法
 - 5.2.4 “共”の後に処置式をとる用法
 - 5.2.4.1 “共”の処置式が出現した時代
 - 5.2.4.2 19世紀末期“共”に関する文献の観察
 - 5.2.4.3 “将”構文と“共”との関係
 - 5.2.5 “共”の前置語としての用法
 - 5.3 結論
 - 5.4 “共”の用例の統計
- 六、台湾語、閩南語地域での“共”の統計
 - 七、結論

一、はじめに

現代台湾語における「共」の用法は以下のである。

- 目標： (1) 伊共我教英語（彼は私に英語を教える）
 (2) 先生共我回答一個問題（先生は私に問題を答える）
 (3) 阿三共阿明問一個問題（阿三は阿明に問題を問う）
- 受益者： (4) 阿母共我煮飯（母はわたしのためにご飯を作ってくれる）
 (5) 我共我小弟寫功課（私は弟のために宿題をしてやる）
- 被動者： (6) 我共伊拍（私は彼を殴る）
 (7) 蚊仔共我叮（蚊は私を刺す）
- 起点： (8) 我共伊提錢（私は彼からお金をもらう）
 (9) 阿明共我租一間厝（阿明は私から部屋を一つ借りる）
- 処置式： (10) 我共伊拍死啊（私は彼を殴って死なせた）
 (11) 伊共物件提去厝裡（彼は荷物を家まで持って行く）

その中で処置式までの用法が興味深い。台湾語、閩南語「共」の文法化過程は今まで議論されてきたが、まとまった結論が未だにない。本研究は、歴史文献、他方言の調査などを合わせて研究した上、「共」の文法化過程を明らかにさせたいものである。主として処置式や受動者の生成過程や時間に重点をおきたい。

二、先行研究

先行研究によると、台湾閩南語の ka33 は kaŋ33 から陽声韻尾 ŋ をなくしたものであり、本字は“共”であると指摘されている。よって本稿は“共”を ka33 の本字と看做し、中国語文献中での変遷のプロセスを観察したい。

閩南語の“共”の歴史的変遷について、全てを明らかにした先行研究は未だ無いが、関連する先行研究は少なくない。

Lien(2002) は、KA の時間的に最も早い文献『荔鏡記』²中の“共”の後

1 本稿第三章を参照。

2 『荔鏡記』は中国明代の戯曲作品で、その言語は潮州方言と泉州方言の混合だと思われる。最も早い閩南語白話文の作品であるが、作者は不明。主に曲牌（劇本）の形式で

にとるものを五つに分けた。それは、目標 (goal)・受益者 (beneficiary)・起点 (source)・処置式 (disposal construction)、接続詞 (conjunction) である。また、現在の各地方の閩南語の“共”とほかの語の用法を観察し、さらに台湾の歴史上、閩南語の文献では“ka33”をどの字で記録したのかを述べた。

曹逢甫、鄭縈 (1996、2001、2003) は、現代台湾閩南語 (以下、台湾語と略称する) の“共”のいくつかの用法を分析して、台湾閩南語の中での文法化過程を分析した。それは以下の通りである。

“一緒にする” という意味 → “伴う” という意味 → 協同関与者 (施事者) → 目標 → 受益者 → 受害者 → 被動者 → 接頭辞

└─ 起点 ─┬─ 起点 ─┬─ 協同関与者 (有生名詞)

└─ 協同関与者 (無生名詞)

Tsao (1994、2005) はさらに Jackendoff の二重層分析 (double-tier analysis) を利用し、台湾閩南語“ka”が被動者をとる (つまり N1 共 N2V の構造で、V が裸動詞である) 用法は起点の用法から変わって来たと言及した。本稿では 4.2.3 において討論する。

また、Hung (1996) は台湾語“共”について、先行研究の分析した“起点”・“被動者”・“目標”を合わせて“対象マーカ―”とし、さらに“対象マーカ―”から“受益者”と“処置式 (補語をとる処置式)”に変化したと推測した。

そのほかに、陳澤平 (2010) も福州方言の“共”について文法化の分析をしたが、“共”が受益者をとる用法から処置式の用法になると主張した。

先行研究では、いまだに“共”の歴史の変遷について完全な分析がなされておらず、また歴史的な文献からも証拠付けられない。そこで本稿は先行研究の分析も踏まえたうえで、主に歴史的な文献の視点から、“共”の完全な変遷過程を明らかにしたい。

三、“共”の本字にかかわる問題

まず、ka33 の本字は果たして“共”であるかを確認してから、文法化あり、演劇で表現される。

の議論を進めたいと思う。

曹逢甫(1996)は台湾語の ka33 を“合”と書くべきであると主張した。それは用例を分析した後、“合”と台湾語の“ka33”との用法は各方面において類似しているため、音韻的に kap2>kah2>ka33 の変遷を経ていると考えたからである。このような説は台湾語において、接続詞と随伴を表す前置詞にはなぜ“ka33”の代わりに“kap2”を用いられるのかということうまく解釈することができるが、しかし同時に以下の問題が生じる。

まず、閩南語戯曲には“合”の動詞以外の用法が全く見つからず、接続詞や随伴を表す前置詞も現われていない。その他、泉州方言(Lien2002)にはいまだに“kang”として陽声韻尾が残っているため、“Ka33”の本字は非入声字である。しかし本字が“合”であるとすると入声字となるので、矛盾している。

曹逢甫(1996)は“Ka33”が kap2>kah2>ka33 の変遷を経たと指摘したが、台湾語の中には、以上の三つの発音が全て存在している。もし、“ka33”を以上の変遷を経たものとしたら、なぜ現在に至っても、“kap2”、“kah2”が存在しているのか、しかもなぜ他の用法には使われず、この二つの発音が接続詞と目標を取る前置詞としてのみ使われるのかを解釈すべきである。

また、台湾白話字文献の記録によると、kap2 と ka33 は同じ文献中に現れたことがあり、しかも kap2 や ka33 は現在の台湾語の主な用法と異なっていない。もし、日本統治時代時代が kap2 や kah2 が ka33 に変化する段階であると仮定したら、文献中に kah2・kap2 が処置式・受益者・目標・起点などの用法に用いられた用例が出てきたはずである。台湾語の中の接続詞と随伴を表す前置詞の用法は、日本統治時代早期においても kap2 とすることができるので、この変遷は随分最近のことだと予想される。台湾白話字文献の中にはこのような記録は全くなかったため、疑わしい。

施炳華(1996)によれば、現在中国泉州の高甲戯では、随伴を表す前置詞・接続詞・処置式の用法の“共”はみな“kang7”(陰去調)と発音される。台湾の泉州移民の高齢者も“kang7”と発音している。そのため、現在の ka7 の発音は、kang7 が陽声韻尾をなくしたものから由来したと考えら

れる。福州地方、例えば陳澤平(1998)の調査でも、陽声韻尾が残されている。もし、ka33がまさしくkap2から変わってきたとするなら、泉州・福州地方ではなぜ陽声韻尾が残されているのかが解釈しにくくなる。

以上の考察により、本稿は台湾語・閩南語の“目標”“受益者”“起点”“処置式”を表すka33あるいはkang33を“共”とするのが妥当であると考え。次章からは、古代文献において“共”がどのように使われているのかを研究していきたい。

四、中古以前の文献における“共”の使用

“共”は早くも上古中国語に現われる。副詞の用法のほかにも動詞の用法もよくみられる。“一緒に所有する、ともにする”などの意味に解釈できる。例えば、

(12) 孔子曰：「丘，天之戮民也。雖然，吾與汝共之。」(《莊子》第六〈大宗師〉)

(孔子が言った。)私、孔丘は、天が懲罰した人間だ。そうとはいえ、私はあなたと一緒に“道”というものを求めに行くのだ”

(13) 願車馬、衣輕裘，與朋友共。(《論語》第五篇〈公冶長〉)

(私は、自分の車と馬、服などを友達と一緒に分け合いたい)

魏晋南北朝になると、“共”は前置詞、接続詞の用法が現われ、次のように共同の行為者を導く。

(14) 吾共諸君欲論越險阻，轉戰千里(三國志，卷十八，吳漢傳)

(私はこのみんなと一緒に困難と危険を乗り越えるつもりで、千里まで戦うのだ)

(15) 過去有人，共多人眾坐於屋中(百喻經，卷上)

(昔ある人は、大勢の人と一緒に部屋の中に座っていた)

劉堅(1989)の研究によると、その後“共”には新たな用法が発展せず、現代に至ると完全に“和”に取って代わられた。

以上の先行研究によれば、“共”には中国語の中で動詞>前置詞>接続詞という発展が見られる。さらに、呉福祥(2003)によると、中国語では“共”だけでなく、“與、及、和、同、跟”などの前置詞あるいは接続詞は全て

動詞>前置詞>接続詞という変遷を経ており、中国語において共通した現象であると言える。

吳福祥(2003)、林怡岑(2011)も、南北朝・唐代に“共”が目標をとる用法が現われていることを指摘している。例えば、

(16) 時寶體佛知彼人心，於先即共彼村人語。(隋代闍那崛多譯《佛本行集經・卷三十七・富樓那出家品第四十》)

(その時、寶體佛はその人の心を知っていたので、先にその村の人に言った)

(17) 父寂，初無其子，共室念言：「我今至善家而無慧子，深自嘆羨，何聖加衛！」(《祖堂集・卷第二・第二十九祖師慧可禪師》)

(父の名は寂。はじめ子がなかったので、妻に言った。“我らは今、至善の家系でも、世継にまげまれぬ。何とも情けないことだ。どうか神様、お守りください。”) ⁴

文献中の“共”は元代以降消失していき、現代中国語普通話では“共”の前置詞あるいは接続詞の用例は見られないが、方言の中には保たれてきた。閩南語方言の中で“共”の前置詞もしくは接続詞の用法が残されており、且つさらに発展してきた。

以上をまとめると、“共”の上古中国語から中古中国語までの変遷はすでに多くの学者が証拠を挙げ議論してきた。そこで本稿では贅言せず、以下に先行研究の結論を引用する。

動詞「～と一緒にさせる」→“前置詞“共同参与者”を表す → 接続詞「一緒、伴う」を表す
 ↳“前置詞“目標”を取る

五、中古以降「共」の変遷

中古以降は主として中国閩南地方、台湾の歴史文献を利用して、「共」の変遷を観察するが、中国閩南地方、台湾における閩南語の歴史文献は数が少なく、文献上に見られない部分は、「共」の共時的な分析によって補充する。

3 この二つの例文は林怡岑(2011)から引用。

4 大乘仏典〈中国、日本篇〉第十三巻118頁を参照した。

5.2.1 “共”の後に起点をとる用法

“共”の後ろに起点を取る用法は、“随伴”を表す前置詞から変化した。その理由は以下のとおりである

まず、中国語普通話の“和”、“跟”が“共”の初期の用法と似ている事である。“共”が接続詞として後に共同参与者を取ったり、前置詞として“随伴”を表したり、前置詞として“目標”（“講”、“説”などの言説動詞に限る）・“起点”を表すのは全く同じである。つまり、“共”の早期の用法は、全て普通話に翻訳すると、“随伴”を表す前置詞“和”と“跟”に置き換えられるため、中国語において伴随類の前置詞は、これらの用法（起点、随伴、目標）が初期的であると考えられる。

また、動作の方向性から見ると、A 共 BV という構造において、“共”が前置詞として“目標”を取る用法は A が B に何か作用を加える、すなわち A が B に何かの影響を与えるということである。しかし、この方向性は“起点”の用法においてはまったく反対になっている。つまり、A が B から影響を与えられる。そのため、“共”の起点の用法が“目標”を表す用法から変化したとは考えにくい。

以上の方向性という制限から、“共”の起点の用法は、共同者を取る用法から変化したとしか考えられない。この時点では“共”の方向性はまだ明確ではなく、“共”の後に来る動詞は通常 A・B 両方に関わるものである。よって“共”の起点の用法は“共”が前置詞として“随伴”を表す物から変化してきたと思われる。

文献からの例としては、

(18) 值人ト共你討恩？（この人はあなたに恩情をも求めたがっているの？）『荔鏡記』

(19) kā-i-boé(共伊買) buy from him(『廈英大辭典』)

(20) 共伊討 van iemand terugkrijgen (claim someone something back)(『廈荷大辭典』)

(21) Chh̄-jit in thâu-ke beh kā siu-chh̄ⁿ chò chh̄-chân hó-sū. (一日 in 頭家欲共收錢做一 chh̄ 好事。) (ある日、彼らの店主は彼らからお金をもらって、いいことをやろうとしている)

『荔鏡記』にすでに例が現われ、その後の『廈英大辭典』、『廈荷大辭典』、教会白話文献にも用例が見え、随分早い時代から残されてきた用例だと思われる。

5.2.2 “共”の後に受益者をとる用法

“共”の後に受益者を取る用法について、本稿は、“目標”を取るものから変化してきたと考える。理由は以下のとおりである。

まず、“共”が“目標”を取る用法は A がある動作を B に加えるというもので、受益者の用法と全く同じなのである。両者の区別は、“共”が受益者を取る構造中の指人名詞は動詞の目的語ではないが、目標を取る構造中の指人名詞は通常、動詞の目的語であるという所にある。

また、“共”の後に目標をとる用法は“受益者”の用法と区別することが難しい。例えば、(50) 伊共我教英語 (彼は私に英語を教えてくれる) の場合、“私 (我)”は“英語を教える (教英語)”の受益者ともなるので、受益者であるかどうかの判断は後の文脈によることが多い。そのため、“共”の後に“目標”を取る用法と“受益者”を取る用法は非常に近いと思われる。よって“目標”から“受益者”に変化するというのは想像に難くない。以上のような考え方は、Hung(1995)、鄭縈・曹逢甫(2003)と共通している。

文献から見ると、

(22) 媒姨，你向爻做媒人，共我做一個 (个)。(受益者)

(仲人さん！あなたいつも仲人をやっているなら、私にもやってくれない?) (『荔鏡記』)

(23) kā-i-khui(共伊開) to open it for him, as a door(『廈英大辭典』)

(24) lēng-goā iā ū 50, 60 ê pē^a-làng tiàm tī I-koán lāi, tak-jit tloh kā in sūn kā in oā^a-ioh. (另外也有 50, 60 个病人踔佇醫館内, 逐日著共 in 巡共 in 換藥。) (ほかにも 50、60 人ぐらいの患者が病院の中に泊まっていて、毎日この人たちのために病院巡視したり、薬を換えたりしています。)

受益者を取る「共」も『荔鏡記』にすでに例が現われ、その後の『廈英大辭典』、『廈荷大辭典』、教会白話文献以降にも用例が見え、随分早い時代から残されてきた用例だと思われる。

5.2.3 “共”の後に被動者をとる用法

本稿の言う“共”が被動者を取る用法とは、“A 共 BV”の構造において B が事実上 V の被動者となるものである。本稿は“共”+“目標”の用法から変わってきたと考える。理由は以下のとおりである。

まず、“共”“目標”の用法には、確かに“共”が“被動者”をとる用法と類似しているものがある。例えば、(1) 伊共我教英語（彼は私に英語を教えてくれる）や (3) 阿三共阿明問一個問題（阿三は阿明に質問をした）の例では、最後の直接目的語を省略し、“共”の後の間接目的語を動詞の後に移すと、“我教伊”、“我問伊”となり、通常の目的語を前置する被動用法と全く同じものになる。歴史的な文献に限られているため、当時のはっきりした用例は見られないが、『廈英大辞典』の中に、このような例が残っている。

(25) kâ-lâng-khng(共人勸) to exhort people

この“人”が“勸”の目標であると解釈できるだけでなく、“勸”の被動者とも解釈できる。つまり当時において、“共”が“目標”を取る用法の中には“共”+“被動者”と見ることができ、その早期の形と考えられるものが現われていた。しかし、その時の宣教師は気づいていなかったか、もしくは“目標”と解釈しても差し支えないと考え、特に用例として取り上げなかった。

多くの先行研究は、⁵ “共”が“被動者”を取る用法は、“共”+“受益者”から変わってきたとしており、ただ“共”の後の動詞をマイナスの意味を持っている動詞に換えさえすれば、“共”+“被動者”の用法になると指摘している。しかし、たとえ“共”+“受益者”がマイナスの意味を含んだ動詞を取っても、“受益者”の役割は消えない。さらに、後に来る動詞がマイナスな意味を持たなくても、“被動者”の役割になれる。例えば、(4) 阿母共我煮飯（母はわたしのためにご飯を作ってくれた）がもしマイナス意味を含んだ動詞 (6) 我共伊拍（私は彼を打った）になっても、本来の“受益者”の意味である“私はあなたのために打った”という意味も残ってい

5 例えば、曹逢甫 (2003) など。

る。なおかつ、(4)においては、“伊”が“受益者”と解釈できるだけでなく、“被動者”とも解釈できるにもかかわらず、後の動詞は完全にプラス意味の“煮(飯)”である。また、早期の文献においては、動詞がマイナスの意味を含まなくても、“被動者”と解釈できるものがある。例えば、“我共人勸”では、“勸”は何らマイナスの意味も含まず、しかもこの文は“被動者”のほかに、“受益者”と解釈することもできる。すなわち、“共”が“被動者”を取るようになったメカニズムは、後の動詞がマイナス意味を含むという事だけで説明できるとはいえない。

歴史的な文献によると、“共”が“被動者を取る用法は『廈英大辭典』(1873)・『廈荷大辭典』(1882)には収録されていない。辞書の中になからといって当時この用法がなかったとは言いつれないが、後に『廈英大辭典補編』『台日新辭書』『台日大辭典』などに収録されていることから、この用法は辞典に収録する価値があるということがわかる。つまり、中国語において極めて特殊な用法だと考えられるにもかかわらず、早期の辞書には収録されていないという事がうかがえる。また、現在では“共”+“被動者”を使うべき文を当時はほかの文型で表したということも少なくない。例えば、被動者主語文・“将”構文・被動者を動詞の後に置くなど。そのため本稿は、早期(20世紀以前)は、“共”が“被動者”を取る用法はまだ普及しておらず、発展している途中だったと考える。

20世紀前後の用例を見ると、

(26) 你若要去我要共伊通知(あなたがおいでになるなら、私は彼の人に知らせます)(『日台言語集』158頁)

(27) 支廳長共百姓訓示(支庁長が人民に訓示します)(『日台言語集』158頁)

(28) 有啊,我有續共伊苦勸(はい、私は、序に注告もしてやりました)(『專賣局台灣語典』174頁)

1930年以後の文献は皆はっきりと“共”が処置式か被動者かということを指摘している。例えば、

(29) カア(共) ...3. を。共伊拿=彼を捉える。共伊徙位=それを移す(場
6 すなわち”你共我拍彼隻狗”(その犬を打ってくれ)のような文ができる。

所を移す意)。(『台日新辭書』)

共(カア)...3.を。共伊拗曲=彼を折り曲げる。共伊注水=彼を水に沈める。
共伊遏止=彼を押し止める。(『台日大辭典』)

以上の歴史的事実から、ある疑問が思い浮かぶ。すなわち、“共”が“目標”を取る用法は古くから現われたにもかかわらず、なぜ19世紀末期になってから“共”がはじめて“被動者”を取るようになったのか、という疑問である。その理由を以下で述べていく。

閩南語白話文戯曲を観察すると、早期の“共”が“目標”を取る用法は八割以上が“説、講、咀、言”など、言説にかかわる動詞であり、ほかの動詞はほとんど見られないという特徴がある。すなわち、“共”の早期の用法は、現在の中国語普通話の“和・跟・同”などの前置詞と同じであり、随伴動詞（あるいは前置詞）の早期的な用法にとどまっていると考えられる。現在でも、これらの動詞は中国語普通話で随伴者・“目標”（言説動詞に限る）・“起点”などを後に取りることができ、“共”の早期の用法と普通話の随伴動詞との違いは、“受益者”の用法の有無だけである。“共”+“受益者”の用法は三・四百年に現れたにもかかわらず、なぜ“被動者”を取る用法が19世紀末になってようやく現われたのだろうか。本稿が主張した“共”+“被動者”の用法が“共”+“目標”から変化したという説は、以上の疑問に答えることができるのではないだろうか。“共”が“目標”を取る用法が言説類動詞から広義の言説類動詞に変わるのに、一・二百年間もかかったため、19世紀末になりようやく“共”+“受動者”の用法が現われたのではないかと思う。例えば、19-20世紀において、“目標”を表す

7 例えば、本稿の統計によると、『荔鏡記』の中には、41個の“目標”の用例がある。その中で非言説類動詞（本稿の定義によると、“説、講、咀、言”にあたらないもの）はたったの4例で、9.7%しか占めていない（“答、明白、現、咒誓”がある）。『荔鏡記』中の言説類動詞は90.3%を占めているが、『蘇六娘』、『金花女』では100%に至っている。『同窗琴書記』の10例中では2例が非言説類動詞で、一つは“發願”で、もう一つは“現”である。以上四つの文献の“目標”表現は、台湾華語で全て“和”と“跟”で代替できるため、本稿はこのような言説類動詞を中国語の随伴前置詞+“目標”の早期の用法と看做す。今後更なる研究が必要だが、早期閩南語の“共”はほぼ言説類動詞と組み合わせて現われるということは確実だろう。

広義の言説類動詞は“苦勸、訓示、點注、通知、參商”があるが、早期の言説類動詞と異なっているのは、これらの動詞の被動者は“動詞”の前にも後ろにも現れるということである。この特徴は、“被動者”の特徴と合致している。

また、日本統治時代の用例によると、当時の処置式の被動者は後置することができる。例えば、

(30) 厝内四面著傾掃伊清氣(家ノ四面ハ奇麗ニ掃除セヨ) (《台灣土語入門》p69)

(31) 是有甚麼緣故打傷伊呢?(何デ彼ヲ疵付ケタカ) (《台灣土語入門》p181)

われわれの認識では、台湾語の“受益者”構文の“受益者”は動詞の後に移すことができない。また起点の用法は、“起点”を動詞の後に後置した場合、意味も完全に異なってしまうため、“目標”の用法だけがより自由に“目標”を後置したり、“共”を用いて前置したりできる。この特徴も“被動者”の特徴と合致している。処置式に関しては5.2.4で検討する。

Tsao(1994)による台湾閩南語の“ka”の分析や Huei-ling Lai(2003)による台湾客家語の“lau”の分析では、Jackendoffの“意味役割の再分析”を用いて、“被動者”は“起点”から変化したと指摘している。理由は以下のようである。

- | | | | | | | |
|----|----|-------|-----|-----|------|-----------------|
| a. | | 警察 | 罰 | 我 | 六百塊 | (警察は私に六百円を罰した。) |
| | 10 | 意味役割層 | 目標 | 起点 | | |
| | | 動作層 | 動作者 | 被動者 | | |
| b. | | 警察 | ka | 我 | 罰六百塊 | (警察は私に六百円を罰した。) |

8 “目標”類動詞の中にも、目標を後置すると意味が変わるものがある。例えば、“共伊講”と“講伊”。

9 台湾客家語の前置詞“lau(摻)”と台湾閩南語の“共”の役割とはほぼ同じで、“起点”、“受益者”、“処置式”、“被動者”、“目標”を取るほか、接続詞と随伴前置詞になることもできる。台湾台中東勢地域の客家語“t'uŋ2(同)”にも同じ役割がある。江敏華(2006)を参照。

10 曹逢甫(2005)によると、“意味役割層と動作層は、前者は目的語の移動方向と位置をつかさどり、後者は動作者と被動者両方の意味役割関係を支配する。”

意味役割層 目標 起点

動作層 動作者 被動者

c. 我 hoo 警察 ka 我 罰六百塊 (私は警察に六百円を罰せられた。)

意味役割層 起点 目標 起点

動作層 被動者 動作者 被動者

b中の“ka”の後に来る名詞は、起点と被動者の両方に解釈することができ、さらにcの被害構文では、“ka”の後に来る指人名詞は通常被動者として見なされる傾向がある。それは、被害構文の主語は通常、被動者として見なされ、“ka”も自ずと被動者マーカーと見做されるためであろう。

Tsao(1994)の分析と本稿が共通する部分は、“共”が“被動者”を取る用法では目的語が前置されても後置されてもよい動詞から変化したと考えているところである。例えば、上で挙げた“罰”は、“共”を用いて目的語を前置しても良いし、動詞の後ろに置いても良い動詞である。本稿が“共”の“被動者”を取る用法が“起点”の用法から変化したとは看做さないのは、“起点”の類に入れられる動詞にはさらに“借・租・税・討”のように動詞の後に移すと意味が完全に異なるものがあるからである。すなわち、“共”の後に来る指人名詞は“起点”としか解釈できず、“被動者”として解釈できない動詞があるからである。ただ、“起点”類動詞のほかにも、“罰・收・提”など、“起点”とも動作の“目標”あるいは“被動者”とも解釈できるものもある。この種の動詞は、当時の日本人の“共”+“目標”に対する解釈と一致するので、“共”+“被動者”の起源の一つと考えられる。もし、“目標”と“起点”の分類を考慮しなければ、このような二重目的語を取る動詞も、本稿の考えている“共”+“被動者”の来源の一種だと言える。この基準で考えてみると、文献中に現れる“勸・苦勸・訓示・點注・通知・參商・罰・收・提・回答”や、文献中ないが、同類の動詞である“教、問”などは皆“被動者”の用法を生んだ動詞だと考えられる。ただ、この類の動詞は、“起点”を取る機能より、“目標”を取る機能が目立つので、一応“目標”から変わってきたとしておきたい。

以上をまとめると、本稿は“共”が“被動者”を取る用法は、“共”+“目標”を表す二重目的語動詞から変化したと考える。

5.2.4 “共”の後に処置式をとる用法

“共”の処置式用法はいわゆる“A 共 BVR”であって、“共”の後の動詞が補語と一緒に出て来るものである。本稿はこの種の用法は“被動者”の用法から変わってきたと考える。

“共”が“被動者”を取る用法と“処置式”の用法との相違は動詞の後の補語があるか否かだけで、この補語の添加によって動作の結果や状態をさらに強調する働きがある。また、“被動者”の用法はそもそも“共”の後の動詞を強調するための存在であるから、台湾語で“共”+“被動者”の用法ができた後、さらに動作の結果や状態を強調したい場合に補語で補う事が必要になる。これによって、“共”には初めて“処置式”の用法が現れた。“共”の本来の特徴は指人名詞を取ること、“目標”から“処置式”に発展する中で、無生名詞を取る用例はなかった。しかし、“共”構文が次第に広まってくると、“共”の後に来る名詞も無生に変わってきて、典型的な処置式の用法となったのである。文献によっても、“共+無生名詞”の用例は最も遅く現われてきて、本文の推論と合致している。以下、“共”の処置式の生成年代、文献における考察、または“将”構文との関係を中心として述べて行きたい。

5.2.4.1 “共”の処置式が出現した時代

Lien(2002)が処置式とみなしているのは

(32) 益春, 恁啞娘木屐擺了, 快共伊移正。(益春、あなたのお嬢様が下駄をここにおいたの。早く正しい方向に移しなさい)

であるが、本稿は“共”を処置式の前置詞とみなすこともできれば、受益者をとるものとみなすこともできると考えている。また、もう一つの例

(33) 不料你共我拆散分離。(まさかあなたとわたしは離散するのか)

は前置詞の随伴の意味に解釈したほうが、文意が通じると思われる。『荔鏡記』の後の『同窗鏡書記』、『金花女』、『蘇六娘』には、処置式の用例が全くないので、『荔鏡記』のこの二つの処置式の用例を別の意味で解釈したほうがよいのではないか。もしこの主張が正しければ、中国閩南地域における“共”の処置式の出現はかなり遅いと推定される。

陳澤平(2010)は19世紀福州地方の宣教師の記録を調査した後に、以下のように指摘した。

根據以上對19世紀傳教士方言資料的調查，我們可以肯定，“共”沒有介引施事的用法。換一句話說，當時沒有用“共”為介詞的處置句。因此可以推斷，“共”表示處置是這個介詞在20世紀上半葉發展出的新功能。

(以上、19世紀宣教師が方言についての調査によると、“共”は“動作者”を導く用法はないと確信できる。言い換えれば、当時“共”を前置詞とする処置文がない。よって、“共”が処置式を表す前置詞は20世紀前半から発展してきたものだと考えられる。)

陳澤平は中国の閩東地方福州方言について主張しているのだが、閩南地方の“共”も同じ状況ではないかと考えたくなる。閩南地方だけが『荔鏡記』の時代において“共”の処置式ができたとは論理的には言いがたい。その点を踏まえると、中国閩南地方の“共”も福州方言と同じように一、二世紀前に現われたのではないかと考えられる。

5.2.4.2 19世紀末期“共”に関する文献の観察

19世紀末期の歴史文献から観察すると、まず、日本統治時代早期の文献には、“共”の処置式に関するものが非常に少ないが、“共”のその他の用法は少なくない。例えば、『台湾土語全集』、『台湾土語入門』、『日台會話新篇』、『專賣局台灣語典』などによると、

(34) 啊你這樣講我明白了，敢是你帶二個賊做陣到茶行某家去就共主人共四個厝內人攏縛起來，搶去三百五十元銀啊(アー夫デハ御前ガ定メテ二人ノ賊ヲ連レ仲間トナツテ茶商某ノ内ニ行キ主人ト四人ノ家内ノモノヲ縛リ上ゲ金三百五十円ヲ強取シタノデアロウ)(『台湾土語入門』176頁)

(35) 你今仔日在艋舺舊街林大有厝內，共林源打傷了，這是有影無(御前ハ今日艋舺ノ旧街ナル林大有ノ宅デ林源ヲ疵付ケタヲハ本當デアルカ)(『台湾土語入門』180頁)

(36) 好好我想現時要共你帶去病院內底，共你醫到好(好シ好シ、今御前ヲ病院ニ連レテ行テ治療ヲシテ遣フト我ハ思フカラ御前ノ用ユル何カノ物ヲ都テ準備スルガヨイ)(『台湾土語入門』190頁)

“共”の処置式の例は最後の長篇物語の部分にしか現れず、全体でも三例しかないため、まだ一般的な用法にはなっていないと思われる。処置式を用いる場合には“將”を用いるか、被動者主語文にするか、目的語をそのまま動詞の後に置くのが優勢である。例えば、

(37) 不可走，汝若是要走我就縛汝（遁グルコトハナランゾ、モシ遁グル様ナラバ縛ルゾ）（『日台會話新篇』187頁）

(38) 將漢字編所註の碼字，寫置下電報紙（其漢字ノ脇ニアル符号ヲ電報紙写スノデアリマス）（『日台會話新篇』211頁）

(39) 有人講，身軀若常常有洗，就是較沒破病（平常カラダヲヨク洗エバ、病気ニ罹ルコトガ少ナイト申スコトデス）（『日台會話新篇』215頁）

正式な教科書や、文型を説明する教科書において、処置式の用法は特に強調されていないが、“共”の処置式の始まりと見なして良いものが現われている。例えば、

(40) 若是如此，彼個所在，你著更埋較低，也是創縊仔，來共伊開水，即會使得嘛（ソレデハ、アノトコロヲモット低クスルカ、マタハ堰ヲ拵エテ水ヲ堰キ止メナケレバイケマセン）（『埤圳用語』）

(41) 昨昏，我去看的時候，有看見一隻厚罩，在要折去，又土地公仔，亦有的朽去，看伊真危險的款，所以水，即共伊斷起來（昨日私ガ行ツテミタ時ニ桁ガー一本折レ、カツテ折ルニオ見マシタ。マタ梓木モ腐ツテオルノモアリマシテ。ハナハダ危險ニ見エマシタカラ水オ止メマシタ。）（『埤圳用語』）

(42) 我要在路裡宿一暗到明仔再即要去台南，不知行李到明仔再即共伊領，能使得沒？（私は途中で一泊して、明朝台南へ参りたいのですが、荷物を明日受け取っても差し支えありませんか？）（『日台言語集』）

以上の例中の“共”はすべて“伊”と共に起し、しかも“伊”が指しているものは常に不明となっているか、前の主語を指しているかのどちらかであるが、それらは削除しても良いくらいのものである。この文型については後述する。

1930年以後の文献は皆はっきりと“共”が処置式か被動者かということを描している。例えば、

(43) カア（共）...3. を。共伊拿＝彼を捉える。共伊徙位＝それを移す（場所を移す意）。(『台日新辭書』)

共（カア）...3. を。共伊拗曲＝彼を折り曲げる。共伊注水＝彼を水に沈める。共伊遏止＝彼を押し止める。(『台日大辭典』)

どの辞書においても“共”の処置式もしくは被動者かの用例があり、しかも主に指人名詞を後に取るものである。また、随伴を表す前置詞の用例はどこにも見られない。

ここで気になるのは、文献において、被動者主語文の中に“共伊”を含む構造が頻繁に出てくることである。この構造は、処置式の構造に似ている。日本統治時代の文献において、これらの“共伊”はさらに“將”構文と組み合わせることができる。例えば、

(44) 將彼尾蛇與伊打死，打死續共伊埋埋呢，就返去（日台會話大全 378 頁）

(45) 彼隻熊嗅見臭臭臭，講臭囉，可食囉，即拋頭來，將此個人與伊撒撒起來食（熊ヲ其臭ヲ嗅ギ着ケマシテ……アア臭イ、モオ腐ッテシマツタ、モオ食エル……ト言ウテ振り向イテ来テ此人ヲ引裂イテ食テシマイマシタ。）(『日台會話大全』 425 頁)

(46) 我此粒紅柿子雖然是小粒，不拘將此粒來去與伊種得土腳下…（我ノ此柿ノ子ワ、小サイコトワ小サイダガ、此粒ヲ地ノ中ニ蒔テ置イタナラ…）(『日台會話大全』 429 頁)

以上をまとめると、19 世紀末期から 20 世紀初期の文献において、“共”に関する特徴は：

1. 処置式の用法は早期の文献に現われず、1930 以降の文献には明確に現われている。
2. “將”構文と“共伊”が組み合わせになって一緒に現われる。
3. “共伊”が固定した用法となって用いられている。

5.2.4.3 “將”構文と“共”との関係

本稿では以下のように考える。一つの文に二つの処置式が必要であると

11 早期の日本統治時代の“共伊”は多くは“與伊”と書かれて、ka7 に読まれている。以下の例文も同様。

は考えにくいため、“共伊”が“将”構文と連用することができるという事は、当時の“共伊”がいまだに“処置式”にはなっていないと考え、このような“共伊”を目標¹²を提示する用法と見なす。

しかし、多くの閩南語研究者は、各地方言の“被動者主語句+共伊”構文を処置式であると指摘している。しかも、台湾語“共”の後に取るのは、“伊”という人称代名詞に限られていることから考えれば、どの人称代名詞を取ってもよい普通の受益者の用法とは解釈できなくなる。さらに、本稿の観察によって、“将”構文が消失してから、“被動者主語句+共伊”構文がしだいに増えた事が分かる。そのため、本稿は、この“被動者主語句+共伊”の処置式は“将”構文から変化したと考えている。以下この点について詳しく説明していきたい。

『荔鏡記』もしくはほかの閩南語戯曲において、“将”構文は頻繁に現われる。例えば、

(47) 将只金釵收入去藏。(『荔鏡記』)(この金色のかんざしを隠してしまいなさい)

(48) 若愛奴身配林大，情願将身投井中。(『荔鏡記』)(もし奴隷の私を林大にめあわずとしたら、むしろ身を井の中に投げるほうがまだ)

(49) 将祭物抬去江邊伺候，等我來祭江。(『金花女』)(供え物を川辺に運んで用意して、私が祭りに来るのを待ちなさい)

日本統治時代の早期において、“将”構文も相当の量が見られる。

(50) 隨時到張家，将張漢扭去那處信地官的衙門。擊鼓。(此事ヲ聞クト直ニ張ノ内ニ来リ張漢ヲ引張ッテ行テ其地ノ地方官ニ急訴シタ)(『台灣土語入門』134)

(51) 我想各所在攏有分局，所以每所再找一個地場，每月五六次不論男女老幼，攏叫伊住做一夥，将這衙門的意思詳細細講給眾人聽，即會上情下達，下情上通。(私考ヘルニ処々ニ分局ガ有ノダカラ一個所毎ニ一ツノ場所ヲ設ケ毎月五六回ツ、男女老幼ノ別ナク彼等ヲ一ノ所ニ集メ役所ノ意味合ヲ委シク衆人ニ聞カスル事ニシタナレバ上ノ情モ下ニ達シ下の情モ上ニ達

12 意味的には、目標を取るものであると思われるが、文中に自由に入れたりすることができる点から考えると、受益者よりかもしれない。

スル事が出来マシヨウ)(『台湾土語入門』204)

(52) 將彼張批提返來還咱(其手紙ヲ提ッテ返ッテアチラエ還スノデアリマス)(『日台會話大全』359)

しかし、上で述べたように、日本時代の“將”構文は“共伊”と連用できる。中国語普通話に翻訳すると、“把...給他...”になり、“給”の後は“目標”を取るようになっていいる。また、中国の南方方言では、通常被動者主語文を結果補語構文として使える。そのため“將”を省略しても意味は変わらず、本稿が観察した“被動者主語文+共伊”の用法となる。“被動者主語文”の用法が次第に広まった後、“共伊”の“伊”が何を指すのかがわからなくなったため、前の被動者と解釈され、その際、“共”は再分析され、処置式の用法になったのではないか。“共”構文が処置式の前置詞として解釈された後、“共”の後に来る“伊”は、もはや前述したような何を指すのかがわからない“目標”ではなくなった。“共”の前の主語としてしか見られなくなったため、被動者主語文の主語は“將”の後の無生名詞であるので、“共+無生名詞”の処置式になったのである。以上の説明を例としてあげてみると、

(53)a 將衫洗好啊(服を洗い終わった) → b 將衫共伊洗好啊 → c 衫共伊洗好啊 → d 共衫洗好啊

(53) a: “將”構文

(53) b: 中国語“把...給他”のように、“共伊”の目標用法と一緒に用いている。その段階において、“共”は本来被動者の用法があるため、被動者を取るようになった。

(53) c: “將”を使って被動者を取ることが不必要なので、省略された後、無生名詞の処置式文は“無生名詞+共伊+動詞”のパートナーとなる。

(53) d: “共”の被動者を取る用法(A共BV)の影響+cの文型→無生名詞を取る“共”の処置式を促す。

日本統治時代は“將”と“共”構文が共存し、しかも競り合う時代と見なすことができる。その後、“共”が“將”に勝り、“共”の処置式への変遷を促した。この説は、なぜ日本統治時代において、意味の分からない“共伊”が大量に現われ、しかもこれらの“共伊”は前述した“共+有生

名詞”と“共+被動者”の用法と時代的に近いのかということが解釈できる。そして、文献によると、“共”構文がしだいに広まった後、“将”構文もしだいに減り、特に“共伊”と共起することは少なくなっている。現在では、台湾語の“将”構文は書面用語にしか使われず、口語文では“共”が取って代わったのである。さらにこの説は、閩南語“共”の後に無生名詞がつく時、動詞は裸動詞であってはいけないということも解釈できる。例えば、“我共這桌子搬*”“我共冊看*”、“我共椅子坐*”、などが非文法的なのは、“共+無生名詞”と“共+有生名詞”の来源が違うためであろう。また、“共”が取って代わるのは“将”構文の処置式であるため、“将”の典型的な処置式の用法は裸動詞を取らないことも理由の一つになるだろう。

閩南語“共”の処置式について、陳澤平(2010)は福州方言“共”の文法化について分析し、“共”の処置式は“目標”マーカー・前述した被動者主語文から変化したと指摘した。

(54) 依姐共伊衣裳洗囉了！

而由於衣裳和伊有領屬關係，因而可以重新分析為偏正結構，形成處置式

(55) 依姐共伊衣裳洗囉了！

而此時共後面所接的伊已經不是必須出現的成分，因而可以簡化成

(56) 依姐共衣裳洗囉了！

((54) 姉は彼のために服を洗った

服と彼の間に所属関係が生じ、再分析によって偏正構造に見なされることができ、処置式になるのである)

(55) 姉はかれの服を洗った

この際、“共”の後に来る“伊”はもはや必須成分ではないため、省略することができる。

(56) 姉は服を洗った))

この説は可能性の高い説だと思うが、日本統治時代の“被動者主語文+共伊”構文を調査したところ、“共伊”はみな動詞の前に現われ、(54)～(56)のように“共伊”が名詞の前に出てくる用例が見られない。また、このような被動者主語文の“共伊”は、“共+無生名詞”の例が現われる以前に、

すでに人称代名詞を省略して前置詞“共”だけで現われるので、当時の人にとって、“伊”は必須成分ではないことが伺え、(55)と(56)の間の橋渡しにはなれない。そのため、本稿の調査によると、この説はまだ議論の余地がある。もしくは福州方言の場合にしか適用できず、台湾語の処置式には当てはまらないのだろう。

以上をまとめると、本稿は“共”の処置式について、二つの来源から変わってきたと考える。

- 1.“共”+“目標”→“共”“被動者”→“共”の処置式
- 2.“将”構文の処置式(将NVC)→将+“共伊”の処置式(将N共伊VC)→“被動者主語文+共伊”の処置式(N共伊VC)→“共+無生名詞”の処置式(共NVC)¹³

5.3“共”の用法の統計¹⁵

	接 続 詞 ¹⁴	随 伴 前 置 詞	目 標	起 点 ¹⁵	受 益 者	被 動 者	処 置 式	被動者 主語文 + 共伊	共+無 生名詞 の処置 式
荔鏡記(明嘉靖)	✓	✓	✓	✓	✓				
金花女(明萬曆)	✓	✓	✓	✓	✓				
蘇六娘(明萬曆)	✓	✓	✓		✓				

13 二番目の変遷過程に関して、例えば(66)の“蛇”のような有生性(animacy)を含める例があるが、人間に比べてはやはり有生性に欠けることがうかがえるので、より無生性のある無生名詞と言えるであろう。一方、一部の有生名詞は一番目の変遷過程と同時に、二番目の過程もたどったことも考えられる。つまり、一番目の変遷が“共+有生名詞”の処置式に至った際、二番目の変遷に伴い、“共+無生名詞”の用法を促したということも考えられなくはない。

14 脚注5を参照。

15 書籍中に“共”が“起点”を取る用例が現われないからといって、当時“起点”の用法がなかったとは言えないだろう。我々が知っている限りでは『荔鏡記』の時代に“共”“起点”の用法はすでに存在している。

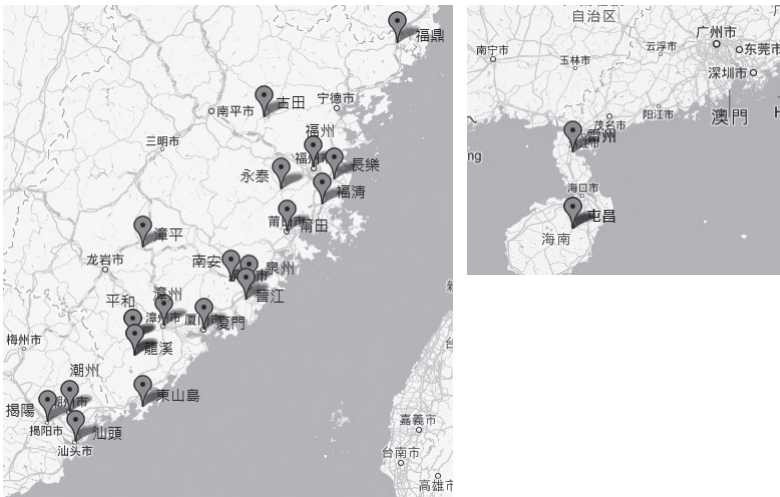
同窗琴書記 (清乾隆)		✓	✓		✓				
廈英大辭典 (1873)			✓	✓	✓	✓			
廈荷大辭典 (1882)			✓	✓	✓				
台灣土語全集 (1896/3)		✓	✓		✓				
台灣土語入門 (1897/3)	✓		✓	✓	✓		✓		
日台會話新編 (1899/7)			✓	✓	✓				
台語類編 (1902/3)			✓	✓	✓				
日台會話大全 (1902/6)			✓	✓	✓	✓	✓	✓	
日台新辭典 (1904)			✓	✓	✓				
埤圳用語 (1911/4)			✓	✓	✓		✓	✓	
日台言語集 (1913/1)			✓	✓	✓	✓		✓	
台語大成 (1916/11)			✓		✓				
專賣局台灣語典 (1922/3)			✓	✓	✓	✓			
廈英大辭典補編 (1923)			✓	✓	✓			✓	
台灣語速修 (1925)			✓		✓	✓	✓		
台日新辭書 (1931/7)			✓	✓	✓		✓		
台日大辭典 (1931)			✓	✓	✓	✓	✓		
台灣語教科書 (1932/7)			✓	✓	✓	✓	✓	✓	
台灣語法 (1934/7)			✓	✓	✓	✓	✓		
記台灣的一種閩南語 (1967)			✓	✓	✓	✓	✓		
台華雙語辭典 (1992)	✓		✓		✓	✓	✓		
台灣語會話 (1992)			✓	✓	✓	✓	✓	✓	

台灣閩南語辭典 (2001)				✓	✓	✓		
閩南方言大辭典 (2006)		✓	✓	✓		✓		
閩南話漳腔辭典 (2007)		✓	✓	✓	✓	✓		
東方台灣語辭典 (2007)		✓	✓		✓			
華音對照現代通俗 台語詞彙 (2010)		✓		✓	✓			
實用台語辭典 (2011)		✓	✓	✓				✓

六、閩南語地域“共”の統計

以下は閩南語各地の方言使用状況：

(図1、2“共”の中国東南地方や海南地方における分布)



	隨伴前置詞	目標	起点	受益者	被動者	処置式
福鼎						kaʔ4
長樂		køy334				køy334
永泰		køyŋ242				køyŋ242
古田						kaʔ4
福清	køy21	køy21		t'e21(替)		tsyŋ53/ k'øʔ22 (乞)
福州	koyŋ242 ¹⁶ / køyk23(乞)	koyŋ242 /køyk23	koyŋ242	koyŋ242	koyŋ242	koyŋ242 / tsuŋ55
南安		kaŋ31	kaŋ31	kaŋ31	kaŋ31	
莆田	kak3	kak3				
泉州	kap5	kaŋ41/ kap5		kaŋ41		kaŋ41/ tsiŋ33
漳州	kaʔ32	ka22/ kaʔ32	ka22	ka22	ka22	ka22
晉江	kaŋ31/ kap55	kaŋ31	kaŋ ¹⁷	kaŋ		tsiŋ/ kaŋ
漳平	ka55	ka55				tsiaŋ24
廈門	kap11	ka11/ kai44	ka11	ka11/ kai44		ka11 / kai44 ¹⁸
平和 ¹⁹	kaʔ	ka	Ka	ka	ka	ka/tsiaŋ
龍溪		kaʔ ²⁰	kaʔ	kaʔ/ka		
東山島	kaʔ32	ka33/ kaʔ32	ka33	ka33	ka33	ka33
潮州	kaʔ5	kai33 ²¹		kai33		
汕頭	kaʔ2	kaʔ2	kaʔ2	kaʔ2		
揭陽		kaʔ ²² /ka ²³	Ka	ka		kaʔ

屯昌		kaŋ213	kaŋ213			xan213/ xəm33
雷州	kaŋ213	kaŋ213		k'i55(乞)		tsiaŋ55
台湾	kap2(合)	ka33/ kap2	ka33	ka33	ka33	ka33
シンガ ポール	kap32	kap32	kaŋ22	kaŋ22		kaŋ22

以上の地図や資料によると、“共”あるいは“合”字の分布地域はほとんど閩東・閩南地域で、台湾・シンガポールの移民も廈門・漳州・泉州からの移出が多数で、使用状況は閩南地方とほぼ同じである。その他に、中国閩南地方・台湾・シンガポールなどの随伴前置詞はもはや“共”を使わなくなっており、“合”を使うようになった。“合”は通常、“目標”の前置詞として使われ、言説類動詞と共起できるが、近くの連城客語地域も“合”²⁵を使っている。そのため“合”を用いて随伴前置詞・“目標”を表す言説類動詞の前置詞とするのは、閩南地方共有の特徴だと思われる。さらに、潮州・汕頭地方に“共”が使われておらず、雷州地方の“共”は随伴や“目標”の前置詞の用法に限られている。興味深いのは現在潮州地方

16 kəŋŋ242 と記したのものもある。

17 董同龢(1959)は陽去調と記した。

18 Ka11 または kang 陽去調。

19 庄初升(2000)(李如龍・張雙慶(2000)に収録)は陽去調と記した。

20 董同龢(1959)は陽入調と記した。ただ、龍溪地域は陽入と陽去調の発音が同じであるため、陽去調の“共”が本字であるとの可能性も排除できない。

21 “kai33”が果たして“共伊”の連音であるか否か確認できない。潮州地域には“共”の発音があるかどうか、参考資料の中には記録されていない。例えば、蔡俊明(1976)。

22 董同龢(1959)は陰入調と記した。

23 董同龢(1959)は陽去調と記した。

24 周知のように“合”の字は『広韻』において、匣母と見母合韻、声調は陰入調とされている。また閩語系統の見母字はよく前置詞として使われているので、本稿が“合”の字と見なす基準は、その音が入声韻尾(pあるいは?)残し、声調が陰入調であることである。

25 音は“Ku35”で、塞音尾をなくしたものと考えられる。

の“目的”を表す言説類動詞（例えば“呷”（言う））は人称代名詞の前にしか置けず、“共”を使わないということである。潮州地方は“共”が処置式に発展しないということにも関連しているかもしれない。

各地の処置式を以下の表で表すと、

	受益者	被動者	処置式 (共+ 有生物)	将+ 共伊	被動者 主語文 (処置式)	被動者 主語文 + 共伊	処置式 (共+ 無生名詞)
福鼎			✓		✓	✓	✓
長楽			✓		✓	✓	
永泰			✓		✓	✓	
古田					✓	✓	
福州	✓	✓	✓		✓	✓	✓
南安	✓	✓	✓		✓	✓	
福清			✓		✓	✓	
泉州	✓		✓	✓	✓	✓	✓
晉江	✓	✓	✓	✓	✓	✓	
廈門	✓	✓	✓		✓	✓	
漳州	✓	✓	✓		✓	✓	
平和	✓	✓	✓				✓
竜溪	✓			✓			
東山島	✓	✓	✓		✓		
潮州	✓	✓					
揭陽	✓		✓			✓	
台湾	✓	✓	✓	(✓ ²⁶)	✓	✓	✓
シンガ ポール	✓		✓		✓	✓	

本文第四章の結論もおおむね、各地方言の状況と合致する。例えば、処

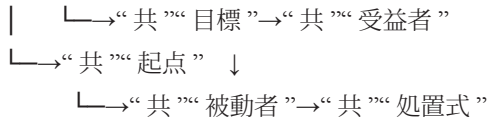
26 筆者が何人かの話者に聞いてみたところ、この用法を文法的に間違っていると考え
る人がいたが、前述したように日本統治時代の資料にはこのような構文が少なくない。

置式を使う用法があれば、通常被動者の用法もある。“共+無生名詞”の用法があれば、“被動者主語文+共伊”の用法も通常ある。しかし、各地の方言資料は限られており、更なる調査によって、本文の論点を補強する必要がある。例えば、泉州方言において、被動者の用例が見つからないが、“共”の処置式構文で、指人名詞を含むものが少なくない。また、古田・永泰・長楽・福鼎地方には、受益者・被動者の用例さえ見つからないのに、処置式の用例があるのは、単に林寒生(2002)が記録していないのかもしれない。

七、結論

本稿は閩南戯曲文献・宣教師の文献・日本統治時代の教科書と記録・各地方言の用法を参考にし、“共”の変遷を以下のようにまとめる。

動詞 → 随伴を表す前置詞 → 随伴を表す接続詞



“将”構文 → “将”+“共”“目標” → “被動者主語文+共伊” → “共+無生名詞”
処置式

また、中国閩南地方・台湾とシンガポールなど閩南語・台湾語を主な言語とした地域は、“共”“目標”、“共”“受益者”、“共”“起点”、“共”“被動者”、“共”“処置式”などの用法しか残されていない。

八、参考文献

一、刊行物・論文

Teng shou-hsin(1982)“Disposal Structures in Amoy”『中央研究院歴史語言研究所集刊』53-2, 中央研究院歴史語言研究所発行 pp331-352

劉堅(1989)「試論“和”字的發展, 附論“共”字和“連”字」, 『中国語文』第6期

Hung su-chen (1994)“A Study of the Taiwanese Preposition KA and its Corresponding Mandarin Prepositions”(台語介詞ka的用法研究及其與國語相對應介詞之比較) 清華大學語言學研究所碩士論文

- Tsao Feng-fu (1994) "On the Mechanisms and Constraints in Syntactic Change: Evidence from Chinese Dialects" 『中国境内語言暨語言学』第二輯歷史語言学, 中央研究院歷史語言研究所出版品編輯委員會發行 pp389-417
- 鄭繁・曹逢甫 (1996) 「閩南語“ka”用法之間的關係」 『台湾閩南語論文集』 文鶴出版有限公司出版 pp23-46
- 施炳華 (1996) 「談“共”與“共伊”的語調——台語文學用字討論」 『成大中文學報』 第四期 pp185-200
- 高育花 (1998) 「近代漢語“和”類虛詞研究評述」 『古漢語研究』 1998年第3期
- Lien Chinfu (2002) "Grammatical Function Words 乞, 度, 共, 甲, 將 and 力 in Li4 Jing4 Ji4 荔鏡記 and their Development in Southern Min", *Dialect Variations in Chinese*, 179-216 Papers from the Third International Conference on Sinology, Linguistics Section
- Lai huei-ling (2003) "The Semantic Extension of Hakka LAU" 『語言暨語言学』 4-3, 中央研究院語言研究所籌備處發行 pp533-561
- 吳福祥 (2003) 「漢語伴隨介詞語法化的類型学研究——兼論 SVO 型語言中伴隨界詞的兩種演化模式」 『中國語文』
- 曹逢甫 (2003) 「台灣閩南語的 ka7 字句」 『漢語方言語法研究和探索——首屆國際漢語方言語法學術研討會論文集』 黑龍江人民出版社出版 pp114~136
- 鄭繁・曹逢甫 (2003) 「客家話動詞組結構研究：時貌、情貌、把字句被字句」 行政院國家科學委員會補助專題研究計畫成果報告
- 江敏華 (2006) 「東勢客家話“同”與“分”的語法特徵及二者之間的關係」 『語言暨語言学』 7-2 中央研究院語言學研究所發行 pp339-364
- 林怡岑 (2011) 中古與近代漢語「和」類虛詞研究、台灣師範大學國文學位論文

二、專門書籍

- 董同龢 (1967) 『記台灣的一種閩南話』 中央研究院歷史語言研究所出版
- 吳守禮抄錄 (1971) 『金花女・蘇六娘』 台北東方文化供應社出版
- 李如禎・張雙慶 (1997) 『動詞謂語句』 暨南大學出版社
- 李如禎・張雙慶 (2000) 『介詞』 暨南大學出版社
- 生越直樹・木村英樹・鷲尾竜一 (2008) 『ヴォイスの対照研究』 くろしお出版社出版

陳澤平 (2010) 『19 世紀以來的福州方言－傳教士福州土白文獻之語言学研究』 福建人民出版社

嶋中鵬二発行『大乘仏典〈中国、日本篇〉』第十三巻 中央公論社出版

長尾雅人、柳田聖山、梶山雄一監修 (1990) 『大乘仏典〈中国・日本篇〉』第 13 巻、中央公論社出版

三、教科書・会話集

田部七郎 (1895) 『台湾土語全集』台湾大学圖書館重印

姫田良造 (1897) 『台湾土語入門』大阪印刷社合資会社

杉房之助 (1899) 『日台会話新篇』台北博文堂出版

岩崎敬太郎 (1913) 『新撰日台言語集』日台言語集発行所

岩崎敬太郎 (1911) 『埤圳用語』台湾語通訳研究会

杉房之助 (1902) 『日台会話大全』台北城博文堂

劉克明 (1916) 『国語対訳台語大成』台北新高堂書店

台湾總督府專賣局編 (1922) 『專売局台湾語典』台湾總督府專賣局

劉克明 (1925) 『台湾語速修』台北新高堂書店出版

台湾總督府台南師範学校校友会編纂 (1927) 『師範学校台語科用台湾語教本』台湾總督府台南師範学校校友会出版

台湾總督府警官及司獄官練習所 (1932) 『台湾語教科書』台湾總督府警察官及司獄官練習所出版

陳輝竜 (1934) 『台湾語法』台北印刷株式会社発行

樋口靖 (1992) 『台湾語会話』株式会社東方書店出版

四、辞典・辞書類

Rev. Carstairs Douglas (1873) “Chinese-English dictionary of the vernacular or spoken language of Amoy, with the principal variations of the chang-chew and chin-chew dialects”(『廈英大辞典』), London: London Trüber & Co.

杉房之助 (1904) 『日台新辞典』台北日本物産合資会社支店発行

Rev. Thomas Barclay (1923) “Supplement to dictionary of the vernacular or spoken language of Amoy”(『廈英大辞典補編』) Shanghai: The commercial press limited

- 台灣總督府 (1931) 『台日大辭典』 台灣總督府出版
- 東方孝義 (1931) 『台日新辭書』 台灣警察協會
- 蔡俊明 (1976) 『潮語辭典』 三民書局出版
- 楊青矗 (1992) 『国台雙語辭典－台華雙語辭典』 敦理出版社出版
- 李榮主 (1998) 『廈門方言詞典』 江蘇教育出版社出版
- 董忠司 (2001) 『台灣閩南語辭典』 五南出版社出版
- 周長楫・周清海 (2002) 『新加坡閩南語詞典』 中国社会科学出版社出版
- 周長楫 (2006) 『閩南方言大辭典』 福建人民出版社出版
- 陳正統 (2007) 『閩南話漳腔辭典』 中華書局出版
- 村上嘉英 (2007) 『東方語台語辭典』 株式会社東方書店出版
- 廖修広 (2010) 『華音对照現代通俗台語詞彙』 五南圖書出版社出版
- 盧廣誠 (2011) 『實用台語詞典』 南天書局有限公司出版

五、各地方言記錄・方言研究

- 董同龢 (1959) 「四個閩南方言」 『中央研究院歷史語言研究所集刊』 第三十本下, 中央研究院歷史語言研究所出版
- 中島幹起 (1977) 『閩語東山島方言基礎語彙集』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所出版
- 中島幹起 (1979) 『福建漢語方言基礎語彙集』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所出版
- 張振興 (1992) 『漳平方言研究』 中国社会科学院出版
- 林連通 (1993) 『泉州市方言志』 社会科学文献社出版
- 馮愛珍 (1993) 『福清方言研究』 社会科学文献社出版
- 項夢冰 (1997) 『連城客家話語法研究』 語文出版社
- 陳沢平 (1998) 『福州方言研究』 福建人民出版社出版
- 周長楫 (1998) 『廈門方言研究』 福建人民出版社出版
- 周長楫・周清海 (2000) 『新加坡閩南話概說』 廈門大學出版社
- 李如竜 (2001) 『福建縣市方言志 12 種』 福建教育出版社出版
- 林寒生 (2002) 『閩東方言詞彙語法研究』 雲南大學出版社發行
- 錢奠香 (2002) 『海南屯昌閩語語法研究』 雲南大學出版社出版

林倫倫 (2006) 『廣西閩語雷州話研究』 中華書局出版

秋谷裕幸 (2008) 『閩北區三縣市方言研究』 中央研究院語言學研究所

林華東 (2009) 『泉州方言研究』 廈門大學出版社

六、インターネット資料

台湾教育部閩南語辭典 http://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/default.jsp

閩南語典蔵 http://southernmin.sinica.edu.tw/home01_1.htm

台湾白話字文献館 <http://www.tcll.ntnu.edu.tw/pojbh/script/index.htm>